



革新の遺伝子 京都企業の挑戦

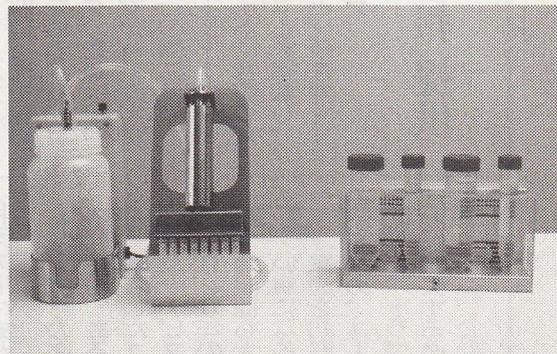
● 81 ●

サンキの大久保康社長が新規事業の医療関連機器事業について語る時は、いつも以上に自信を感じている。自ら立ち上げた事業への思い入れもあるが、2013年に開発したアスピレーター(吸引機)が、14年秋から大手医療関連代理店にOEM(相手先ブランド)供給(相手がブランド)供給することが決まるなど、早くも実績をあげていることが自信につながって

いる。同社は82年に大久保社長の実父の大久保博文会長が京都市内で設立した。地元のエレクトロニクス関連産業を中心に半

サンキ

導体製造用の自動機や、引き離し力測定装置など検査装置の受託開発で創業、今も主力事業として多くの取引先から開発委託の相談が寄せられている。大久保社長は大学院博士課程を終えて10年に入社した。早くから「さまざまな装置を自分で考え、作って、自分で売ったかった」(大久保社長)と、ものづくり家業を継ぐつもりだった。ただ、経営方針は「受託開発だけでは企業として成長は難しい。自社ブランドなど新製品が必要だ」と定め、博文会長に考えを伝えていた。新製品とはもちろん医療関



マルチチャン「発」(同)と一人でできた製品だ。ネルアスピレーターとドライサーモリザーバー……、細胞培養や試薬調整、遺伝子抽出といった医療・ライフサイエンスの知識を併せ持つた数少ない経歴と自称す「遠沈管用ドライサーモリザーバー」は、「研究者のあったらいいなあ」といった願望をそのまま形にしたもの。大久保社長自身が研究者時代に「いいなあ」と思っていた製品だ。製品の評価、データベス、培養プレート関連など現在、12のアイデアを京都大学などとプロジェクトを組んで製品化を進めている。「この3年が勝負。3年後には自社製品を10アイテムまで増やす。なるべく早い時期に医療事業の売上高シェアを5割に伸ばす」計画だ。

実績上げる医療関連機器



大久保 社長

「経験や人脈を通じて、たくさんアイデアを持っている」(同)と医療機器事業への自信は大きい。というのは、工

学部で電子回路やプログラミングなどを学び、大学院は京都大学大学院工学研究科の医療工学研究室に

つまりは、研究現場でどんな装置があれば役立つか、「実体験のニーズとして知っているだけでなく、その装置を自ら開

リザーバー」は、「研究者のあったらいいなあ」といった願望をそのまま形にしたもの。大久保社長自身が研究者時代に「いいなあ」と思っていた製品だ。

▽所在地 京都市伏見区久我東町3の6、075・934・6631▽社長 大久保康氏▽従業員 4人▽主な事業 半導体製造用自動機、検査機などの受託開発、医療機器の開発▽設立 82年(昭57)4月(隔週金曜日に掲載)